
臆病者の恋煩い

宮村 鴻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臆病者の恋煩い

【Nコード】

N0635V

【作者名】

宮村 鴻

【あらすじ】

※BLです。 学園のトップである生徒会長、御影利春には好きな人がいた。彼は御影の親衛隊長であり、おいそれと関係を進める訳にもいかなかった。 学園のトップである生徒会長の親衛隊長、藤堂秋吉には好きな人がいた。彼は学園のトップであり、輝かしい将来を約束された身だ。おいそれと関係を進める訳にはいかなかった。 一步が出ない御影と動けない秋吉。広がらないが、縮まらない距離。「臆病者の恋」の結末は果たして……。 ※各章ごとに視点が変わります。それに伴い地の文での登場人物の呼び方が変わ

ります。ご了承ください。

登場人物（前書き）

嬉しくない情報付き。あくまで名前確認用にどうぞ。

登場人物

☆生徒会長親衛隊

隊長

藤堂 秋吉

トウドウ アキヨシ

二年。奨学生。紅茶派。

副隊長

岬 時雨

ミサキ シグレ

二年。チャイ派。

生徒会長補佐

結城 美晴

ユウキ ミハル

一年。コーヒー派。カフェオレ

☆生徒会会計親衛隊

隊長

清洲 舞華

キヨス マイカ

二年。緑茶派。

☆生徒会

生徒会長

御影 利春

ミカゲ トシハル

三年。紅茶派。インスタント

副会長

松下 椿

マツシタ ツバキ

三年。コーヒー派。ブラック

会計

平塚 鉄心

ヒラツカ テッシン

二年。紅茶派。あだ名「テツ」

書記

英 真由理

ハナブサ マユリ

二年。日本茶派。あだ名「えい」

学校の顔（side 生徒会（前書き））

すでに完結している話ですので、短期集中連載となります。よろしくお願いします。

学校の顔（side 生徒会

——コンコンッ

生徒会室の高質な扉の向こうでノックの音が聞こえ、御影は知らずの内に口元を緩ませた。

「入れ」

誰が来たのか分かっている。口調はあくまで高圧的だが、心の中では期待でいっぱいだ。

あまりだらしない表情をしないように緩む口元を引き締め、御影はゆつたりと自身に割り当てられた椅子に腰をかけた。

早く、早く——。

「失礼します」

扉が開くと共に室内に足を踏み入れたのは華奢な男だ。

控えめに俯いたその姿は淑やかで気品に満ちている。

全寮制男子校という見るも無残な荒れ野原に咲く花たち。彼らは潤いのない学園に置いてちよつとしたアイドルのような存在だった。

小脇に書類を抱えて音を立てずに扉を閉め、改めて、御影に向けて頭を下げた。

「御影会長親衛隊長、藤堂秋吉です。依頼されていた補佐の件について報告に参りました」

秋吉はそう告げると会長席の前に進み、手に持っていた封筒を差

し出した。

彼のような華奢な生徒と対をなすように、学園のカリスマとされるのが御影たち生徒会だ。ほぼ役員一人一人に親衛隊という名のファンクラブが存在し、秋吉はそのトップである生徒会長の親衛隊長だった。

生徒会役員の手伝いをする補佐は役員に任命権があったが、その権利を行使したのは今期の生徒会では御影が初めてであり、補佐の選出を秋吉に頼んでいた。

しかし、御影が補佐を所望したのはただ単に仕事が忙しいからではない。

「こちらで三名の候補を挙げましたので、よろしければ御影様にお試しいただいて、最終的に決めていただきたいのですが、いかがでしょうか」

「候補か、……候補ね」

当てが外れ、御影は思わず溜め息混じりに呟く。それに秋吉は素早く反応して口を開いた。

相変わらず優秀なことだ。と御影は内心で呟く。過敏ともとれる反応は少し、息苦しい。

「あの、ご希望の隊員がいらっしゃったのであれば、そちらを手配いたしますが……」

「いや、いいよ。お前が選んだのだろうか？　それなら、優秀なはずだ。大丈夫」

御影は秋吉を宥め、封筒から紙を取り出した。顔写真の貼られたそれは、さながら履歴書のようにそれぞれの得意分野などが記載してあった。

「ありがとうございます。それぞれの試用期間はどれぐらいにいたしましょう」

「そうだな。一週間でいいだろう」

「分かりました。では、そのように伝えておきます」

「ああ、よろしく」

「はい。それでは失礼します」

再び、彼は御影に向けて一礼し、生徒会室を出て行く。

きびきびとした態度はいつそ清々しい程で、不快な点は一つも見当たらなかった。

扉の向こう、秋吉の足音が聞こえなくなるのを確認して、御影はため息を吐いた。

「候補、ね……」

「素直に、秋吉くんに傍にいて欲しいって言えばいいのに、バカです」

独り言のようなぼやきに言葉を返したのは、御影から見て左の席に座る青年だ。学校指定ではない制服を、しかし違和感なく着こなしてシルバーフレームの眼鏡のブリッジにそっと指を添えた。その表情には若干蔑みが含まれているのが見てとれて、御影は小さく舌打ちをした。

「コラ、椿。てめえ、俺に向かってバカとはなんだ」

「バカだからバカって言ったんです。補佐なんて遠回しに頼むからこういうことになるんですよ」

そう、全ては御影が秋吉を傍に置いておきたいが為に打った芝居のようなものだった。違和感が無いように秋吉に頼んだのがすっかり裏目に出てしまっていた。

大きく息を吐くと、御影は椅子の背もたれに寄りかかった。身体を包み込む、無駄に豪華な背もたれは、標準身長を軽く超える彼の体重をいとも簡単に受け止めた。

「頭のキレる副会長サマはうまく立ち回ったっていうのか？」

「僕の場合はなんとでも言い訳付きますしね。自分では似合わないから、この衣装を着て欲しいんだ、とか。僕の身長じゃ、着れるコスチュームは限られているし」

「ああ、……コスプレか」

そう。生徒会のナンバーツィとなる副会長を務める松下椿はコスプレイヤーであることで有名だった。今現在も某星座男子の制服を着て、優雅に紅茶を啜っている。

「僕が女子キャラのコスプレをするのは無理がありますが、この学園だったら身長も性格も選び放題。副会長をお願いを断る生徒もなかなかいませんからね。適当な理由つけて仲良くなれば、こっちのもんですよ」

この学園では総選挙とは名ばかりの人気投票で生徒会が選出されていた。それでも生徒会が成り立っていくのはそれぞれが矜持を持ち、一般生徒や教師陣、保護者の期待に応えているからだろう。

ともあれ、人気ナンバーツィの副会長の頼みを断る生徒などそういない、とそういうことなのだ。

「うらやましい」

「会長には会長のやり方があると思いますよ。会長がお仲間だったら、正直引きます」

「失礼だな」

「普段がよく見る俺様会長なんですから、それ以上キャラ作る必要

ないですよ」

「俺様って……」

「自覚がないとは言わせませんよ。それとも我が儘の方が良かったですか？」

「いや、俺様でいい……」

元来おしゃべりなのか椿の剣幕に押され、御影はぐったりと机に突っ伏した。

「おっつかれさまでーす！ あにゃー、カイチョーお疲れかにゃ？」

だらりと敬礼をしながら入ってきた青年は、机と仲良しになっている御影の顔を覗き込み、くるくるとその場を回った。

明るい茶色で染められた髪は丁寧にケアされ、頭頂部に黒髪は見受けられない。通常の公立高校ではむしろ、問題児に見られるだろうその容姿で生徒会入りを果たすのは、やはり学園特有と言える。

「こら、テツ。邪魔をするんじゃない」

「あうー、カイチョーはそんな心の狭い人じゃないよ」

ハナフサ
「英くんも大変だねー」

まだ御影にじゃれついているテツに溜め息を吐いて英は肩をすくめた。

テツとは正反対の真面目な風貌の英は短く切った黒髪も相俟って、アイドルというよりかはプロのスポーツ選手に向けるような憧れを抱かれることが多かった。

会長の御影、副会長の椿、会計のテツと書記の英で今期の生徒会役員は勢揃いである。

「テツ、いい加減にしろ」

英はテツの首根っこを掴み、動きを抑えた所で、椿の方に顔を向けた。

「副会長。会長はどうしたんですか？」

「ちよっと振られたんですよ。ほっとけば治ります」

「ん、んー？ あっきーのことかにゃ？」

「平塚、知っているのか？」

「あっきーとはお茶飲み友達だによ」

「聞いたことない」

「いちいち言わないしょ？ それにオレのそこは基本そういうの自由だしね」

テツの親衛隊は彼の理想もあり、隊内に面倒な規則もなく「みんなでなかよく」が唯一の規則と言えた。そのため、隊員以外がテツと話していても寛容だった。

「それにあっきー可愛いもんね」

「……知ってる」

要はテツに釣り合うだけの容姿であれば、文句はないのだ。

御影は悔しそうに唇を噛んだ。本来一番近くに居られるはずの自分が一番遠くにいるのだ。しかもそれは御影が距離を取っているのではなく、向こうが近付いてこようとしないのだ。それでは苛立ちも増すばかりだろう。

「あっきーはカイチョーのこと崇拜しちゃってるからねえ」

「どういことですか？」

「『御影様と同じ世代というだけでも恐れ多いのですから、それ以上の関係を望むなどもってのほかです』って……さ」

「会長、あなた何したんですか」

「何もしてねえよ」

崇拜されているということはつまり、同じように見られていないと同意。その立場が上であろうと下であろうと同じ所に立っていないのであれば今以上の関係に発展することはない。

それがなんとも歯痒く、御影は唇を噛んだ。

「痕残りますよ」

「……ちっ」

「会長のインパクトが強過ぎたんじゃないですか？」

冷静な英の言葉に反論する気はなかった。

実際、そうだったのだろう。第一印象が大事なのだと前会長に説かれ、それを実践したまだった。代々俺様会長になるのはこの所為じゃないか、と思ったほどだった。

「もうこの話は止めだ。仕事しろ」

勢いよく身体を起こし、積んである書類に手を伸ばす。集中した振りをしていれば、他の役員も皆それぞれの仕事に手をつけ始めた。

御影は、先程秋吉が持ってきた書類を改めて確認する。三名の候補。三者三様に知的な印象を得る。実際、光るものがあるのだろう。そうでなければ秋吉が推薦するはずはない。

しかし、この中から選ばなければ、秋吉が補佐になるだろうか。そんなことを思いながら御影は封筒をしまった。

会長補佐選抜（Side 親衛隊

「……という訳で、一週間ずつ補佐を務めていってください」

生徒会室から帰った秋吉は早速補佐候補を集め、御影との間で決定した事項について候補たちに報告した。

「隊長、本当にやらなくていいんですか？ 隊長も候補に挙がったじゃないですか。それなのに、辞退するなんて」

候補は各学年一人ずつ。意図して選んだ訳ではないが、結果として各学年の代表が選ばれた形になった。

秋吉に対し、不満げな声を上げたのは意外にも一年生だ。彼は氣遣いと気配りができる、傍にいて気持ちがいい隊員として、同級生はもちろん、上級生からも評判がいい。

候補決め当初は秋吉を推す隊員もいたのだが、彼自身がそれを辞退した為、今の3人が補佐候補となったのだ。

「出来る方の補佐だもの、出来る人の方がいいでしょう？ それに僕は隊長だから、ここを離れる訳にはいかないよ」

「でも……」

「結城くん、僕はあの方の傍には居られない。遠くから、影から、あの方をさりげなく助けられればそれでいいの。僕にあの方の隣に立つ資格なんてない」

秋吉に意見した一年生——結城はその壮絶なまでの献身を思っ顔を歪めた。

一体、二人の間に何があったというのか。秋吉の一方的な自己犠牲で、御影と秋吉との格差は広がるばかりだ。

息を吐き出し、首を振る。きっと何を言っても秋吉には届かないだろう。

「もう、いいでしょ？ 美晴。隊長もこう言ってるんだし？」

補佐候補の三年が呆れたように結城と秋吉を見た。

結論の見えない議論など余所でやればいい。

彼が今、一番気になっているのは一体誰が御影に選ばれるかということだった。

「最初は僕でいいかなあ？ 年功序列でいいでしょ？」

三年の彼は、御影と同じ学年だということも自信の一端を担っているのか、手入れの行き届いた栗色の髪をいじりながら自信満々にそう言った。

結城に残りの二人がどうぞと促せば、これでもう用事はすんだとばかりに、秋吉に声もかけずに部屋を出て行った。

「隊長……。学年順ですと、次は僕ですか？」

残された候補の内二年生が声をかける。今が親衛隊の活動中ということもあってか、同級生であっても秋吉に対して丁寧な言葉遣いだ。

「結城くんは最後でいい？」

「はい。問題はありません」

「じゃあ、二番目でお願ひします」

秋吉がそう言うと、彼も頭を下げて部屋を出ていく。
残されたのは、秋吉と結城だけだ。二人の間に沈黙が落ちる。

「……そんなに、頑になる必要ないんじゃないですか？」

異常なほど傍にすることを嫌う秋吉を、結城は不思議そうに見つめた。

親衛隊だからといって、御影の傍にいられない訳でもなく、御影が親衛隊の存在を煩わしく思っている訳でもない。それなのに、何故、秋吉は頑なに必要以上の関わりあいを避けるのか。

「だって、あの方は『御影』だから」

「……どういことですか」

「将来の日本を背負って立つ方だよ？　しっかりした家のお嬢様とお付き合いするべきなんだよ」

「それは、真っ向から親衛隊を否定していませんか」

「親衛隊はファンクラブでもないし、まして、セフレの集まりでもないんだよ。想うことは自由だけど履き違えちゃいけない。……勘違いしている人は多いけどね」

秋吉は一度そこで言葉を切り、ふと、扉を見やった。三年の彼はきつと『そういう意味で』親しくなりたいと思っているのだろう。

秋吉は知らずの内に眉間に力が入っていたことに気付き、小さく息を吐いた。

「本来、親衛隊とは守るべき方の影であり、盾であるべき存在だと思う。だから、それにかこつけてどうこうなろうと思う方が間違っている。……でも、こう思うのは僕だけだろうから、他のみんなに強要はしない。もちろん、結城くんにも、ね」

言い切ったのか、秋吉はふうと一息、息を吐き出し椅子にもたれかかった。

「ごめんね」

「なんで謝るんですか」

「君だって御影様が好きなんでしょう？　なのに、それをただの他人である僕が勝手に否定して、踏みにじってしまった」

「そんなことないですよ。俺は、あの人嫌いです」

「……それはそれでちょっと」

「だって、こんなに秋吉先輩を困らせてる」

ちよつとした告白を聞いた気分だ。秋吉は結城の言葉の裏にある感情を探ろうとしながらも躊躇していた。再び沈黙。しかし、今度のそれは重苦しく、秋吉にのしかかる。

喘ぐように息を吸い、彼は口を開いた。

「僕は、いいんだよ。あの方と同じ時を生きていると思うだけで満たされる」

「先輩はっ！」

「……………」

「先輩は本当に、それで、いいんですか……？」

結城は秋吉の肩を掴み、目を合わせて真意を探ろうとしたが、秋吉は軽く目を伏せることで彼の視線から逃げた。話したくないとそう言っているのだ。結城は勢いをなくし、ぐたりと項垂れるように頭を下げた。

三度の沈黙。今度は第三者の手で破られることとなった。

「二人とも、遅いよ。何してんの？」

「時雨ちゃん、」

がらりと戸を開けた青年は岬時雨。御影会長親衛隊の副隊長であ

る。秋吉よりは背が高いが全体的に線が細いため、華奢な印象を受ける。

手に持った鍵を鳴らしながら二人に近づき、交互に顔を見ると、時雨はほんの少しだけ不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。

「結城くん。あんまり隊長困らせたらダメだよ」

「……………」

幼子に言い聞かせるような時雨の言葉に結城は何も返さない。

「なにー、これー。なまいきー」

時雨は結城の耳を容赦なく引っ張り、慌てた彼の耳めがけて平手を打った。……もちろん手加減をしていたが、結城は声にならない悲鳴を上げた。

「……………っ！」

耳を抑えてうずくまる結城には目もくれず、時雨は近くの机に鍵を置いた。

「結城くん、戸締まりよろしくね。それから、耳の調子よくなかったら、ちゃんと保健室に行くんだよ。じゃあ、またね」

「待って、時雨ちゃん！ あっ、あ、結城くん、ごめんね。またね」

「はーやーくー」

ずんずんと歩く時雨に手を引かれ、もつれる足取りで秋吉は引きずられて行く。

「ちくしょう。……いてえ」

後に残された結城の眩きは無人の教室に虚しく響いただけだった。

会長補佐選抜（Side 親衛隊（後書き））

次回は水曜日を予定しています。

インターンシップ会長補佐 (Side 生徒会 (前書き))

各章ごとに視点が変わっています。地の文内での登場人物の呼び名が章によって全く違います。視点の持ち主にとっての相手の呼び名が反映されているとお考えください。

インターシップ会長補佐（Side 生徒会

「後一人だぜ」

補佐のお試し期間が始まって二週間。二人の候補はすでに、補佐を辞退したらしい。残るはあと一人。

腕を組み、仁王立ちで笑う御影を椿は冷ややかな目で見つめた。

「なにやってんですか、馬鹿らしい」

「手酷いな」

「あなたに言われたくありません」

今日から最後の一人がやってくる。一年と聞くから今までの二人より容易に扱えることだろう。

御影はじわりと込み上げる笑みを堪えることが出来なかった。

最後の一人を追い出せば、秋吉は自分の補佐を勤めてくれるだろうか。

来週から傍に立つはずの者を思い浮かべ、御影は目を閉じた。

――コンコンッ

「入れ」

補佐候補の書類を持ってきた秋吉を迎え入れた二週間前のデジャブのようだ。

最後の一週間の扉が静かに、開かれた。

「一年五組、結城美晴です。よろしくお願いします」

武道を嗜^{たしな}んでいたのか、凜と背筋を伸ばして頭を下げる様もきびきびとしていて嫌みがない。第一印象は合格。だが、どうにかして欠点を探したい御影にとっては厄介な相手だった。

「お前の席はそこだ。……座っている」

最初が肝心。素っ気ない口調で、本人の顔も見ずに席を指差した。結城は文句も言わず席につく。ここまでは前の二人も同じだった。問題はこれから。

御影はまず、徹底して補佐に仕事を回さなかった。生徒会というコミュニティの中、異物な自身とどう折り合いを付けるのか。

一人目はすぐに御影に色目を使って仕事をねだり、二人目は泣きそうに潤んだ瞳でじっと机を見ていた。

さて、三人目は……。

「つて、お前、何してる」

「え？ 宿題ですけど。……だって、仕事ないんでしょ？」

テキストとノートを広げ、三人目は堂々と課題を片付けている。他の二人と違い、補佐という立場に執着していないように見えた。それが新鮮と言えば新鮮か。

「お前、補佐をなんだと思っている？」

純粹な疑問だった。前の二人には聞いていない。三人目はきよとした顔で、御影を見つめた。

「お忙しい会長様の仕事をお手伝いする立場ですよね。忙しくないなら手伝う必要なし、とそういう判断です」

正論。

御影は感心し、補佐用に取りつておいた書類を渡した。

「仕事だ。分らないことがあったら聞いてくれ」

「なんだ。仕事あるんですか」

いそいそとテキストとノートを片付け、三人目は書類を受け取った。

それから、暫くは紙面をこするペンの音しか聞こえない、静かな時が流れた。

さて、次の嫌がらせだ。

御影は三人目が提出した書類について、思いつく限りのダメ出しをした。重箱の隅をつつくような、自身で直しても負担にならないほどの小さなミスでもなんでもだ。

一人目はそれで怒りをあらわにし、二人目ははらはらと涙を溢しながら、謝罪を口にした。

三人目は不思議なほどに、御影をじっと見つめたまま、動かなかった。指摘を終えた御影が書類を突っ返せば、すみません、一言席へと戻っていった。

三度の修正でやっとokをだした御影は一日目をそこまでにして三人目を帰らせた。

去り際も三人目は何かを思案するように、不思議そうな顔で頭を下げ、生徒会室を出ていった。

「……変なヤツ」

「あなたに言われたくないですね」

「お前が文句を言うな、椿」

一段落、という体なのか、役員たちはわらわらと御影の座る会長席に群がった。

「まあ、確かに、今までとは毛色が違う感じですね。変な子と言えば、変な子でしょうか」

「あの子、凄くキレるらしいよー」

「……暴力を振るうようには見えませんが」

「分かってる癖にー……。頭の良く回る子ならいい？」

「ストリートダンスでもやっていたんですか？」

「……………えいいー。椿ちゃんがいじめるー」

「副会長、あんまりからかわないでくださいよ」

「分かってますよ。ちなみにそれは『あっきー』情報ですか？」

「もちろん。自慢気に言ってたよ。自分の話じゃないのにね。すごく嬉しそうだった」

思い出すように遠くを見る鉄心に浮かぶ表情は楽しげではない。

「どうもさ、あっきーは自分を下に見すぎてると思うんだよ」

「悲劇のヒロインを気取ってるんじゃないですか？」

「厳しいー。それなら、まだ楽だと思うんだよねー？ あっきーのあれは、……………うーん」

「藤堂は奨学生だろう？ その所為じゃないのか？」

「しょうがくせい……。漢字がないと伝わりにくい肩書きだね」

「椿ちゃん！ 話の腰いちいち折らないで」

「そうか。あいつ、特待だったんだな。どうも腰が低いのはその所為か」

「カイチョー、今の椿ちゃん総スルーなのね。……まあ、いいや。多分ね。周りはみんな御曹司だし？ 肩身狭いのかも」

「そんなもんかね」

「でも、それにしたってあっきのカイチョー信仰は異常」

鉄心はそう言って肩をすくめると自席に戻った。それを見た英も同じく席に戻る。

残ったのは椿一人。御影が見上げて見れば、嬉しそうに口端を持ち上げている。

「何笑ってんだよ」

「どっちが勝つかなんて思って」

「俺に決まってる」

「俺様乙」

「黙れ」

「まあ、頑張ってくださいよ」

にやにやと笑みを浮かべて漸く椿も自席に戻った。
全く、せつかくの美形が台無しだ。

ともあれ、あと四日。結論はすぐに出るだろうと高をくくっていた。

その当てが外れ、三日目。ちょうど半分。三人目も慣れてきたのか、次第に効率よく、細やかで目の行き届いた書類を作成するようになった。

「……………いいだろう」

「どおも」

それならば、と大量の仕事をふっかけてみた所で三人目は特に苦にする様子もなく淡々と仕事をこなしていく。

他にどんな嫌がらせをしてやろうかと思案していれば、終わった仕事を差し出された。

やけに早いと思って隅から隅まで粗を探すが、目に付くような所はない。

まるで完璧。……つまりは、面白くなかった。

「前の二人もこうやって追い出したんですか？」

「……………っ!？」

不思議そうな響きで投げかけられた言葉に、御影は過敏に反応してしまった。

がたんっ、と音を立てて立ち上がる。これでは認めたも同然である。しかし、そんなことは関係ない。

一筋縄ではいかない、とそう言った椿の声が脳裏をよぎった。

「認めたってことでいいですか？ あなたもバカですね」

「俺に向かってバカとはなんだ」

「……また、言われてる」

「椿、黙れ」

「はいはい」

「それで？」

「これで俺まで追い出したら、あの人、隊長やめますよ?」

「なんだと!」

息巻いた御影も三人目は軽くいなすに留める。

「俺を採用しろと言ってる訳じゃないですけどね。」

自分には見る目が無かったんだと、御影様のお役に立てる隊員を

見つけることが出来なかったと、自分を責めて、やめます。もう二度と先輩の前に姿を見せないかもしれない。……それでもいいんですか？」

「……どうしてそう言い切れる」

「そういう人だからです」

「俺もー、結城くんに一票ー」

「平塚……？」

「確かにあるかもしれないよ。『もう、御影様に顔向けできません』とか言いそう」

「候補がみんなダメだったのなら、自分が……とは思わない人です」

「おい、三人目。お前、俺に対する態度とあいつに対する態度が違いすぎねえか」

「端から名前も覚えようとしないうような人に払う敬意は持ち合わせていません」

ぐうの音も出ないとはこの事か。

「確かに君は、良く気が付く子なんだね。結城くん」

「副会長……」

「会長、腹くくったらどうですか？ この子だったら、仕事も早いし、どうやらあなたの親衛隊とはいえ、あなたに興味はないみたいだ」

「………」

「凶星ですか？」

「……人が悪い」

結城は眉間に皺を寄せたが、椿はそれを楽しそうに見ているばかりだ。

「会長」

「……試用期間は一週間だ。金曜日に決める」

そう、ぶっきらぼうに言い放つと、御影は生徒会室を出て行った。仕事は、と思えばいつの間にやら片付けてある。抜け目ねえな、と一人ごちて、椿は結城に顔を向けた。

「会長が帰ってしまったので、今日は帰っていいですよ。お疲れさまです」

「今のが素ですか」

「僕は腹黒副会長ですからね」

「……？」

「役目の話です」

にこりとウィンクされ、はぐらかされた気もしたが、結城は渋々生徒会室を後にした。

それからは、結城にも適切な量の仕事とそれ相応の指摘が与えられた。

他の役員たちも結城に慣れ、すっかり生徒会の一員だった。

そして、金曜日。

水曜日のすったもんだが功を奏したのか、結城は晴れて会長補佐の身になった。

「秋吉……」

一人悔しそうな会長はさて置き、結城はほっと胸をなで下ろした。

インターンシップ会長補佐（Side 生徒会（後書き）

次回は土曜日を予定しています。

秘密の花園 (Side) 生徒会長親衛隊

――ふう

悩ましげが溜め息が一つ。渡り廊下に零れた。

御影利春生徒会長親衛隊隊長、藤堂秋吉その人である。

窓際に立つ彼の凜とした佇まいと仄かに立ち上る憂い。その絶妙なバランスが色気となり、彼の存在を際立たせている。

傍を行く生徒がほぼ一人残らず振り返るほどの美貌。しかし、本人にその自覚はなく、ただ、窓の外へと視線をやっていた。

視線の先には、生徒会長御影利春と、先日補佐に就任した結城美晴の姿。

結城という御影は随分とリラックスしているらしく、普段見ることのできない笑みを浮かべ、じゃれあいのようなちょっかいをかけている。

それを見つめる彼の瞳はしつとりと濡れ、窓をなぞる指先はなんとも心許なく、庇護欲にかられた男たちの注目の的だった。

「何見てるの？」

「……あ、時雨ちゃん」

さりげない風を装って時雨が秋吉に声をかける。その際に、周りを牽制するのは忘れなかった。

ギャラリーが散ったのを確認して秋吉の隣に立つ。彼の視線を追いつ、現在学園の中で一番有名だろう二人を視界に入れた。

「ああ、結城くんと会長？ 上手くやってみただね」

「うん、最初はどうなるかと思ったけど、大丈夫そう」

うすらと笑みを浮かべて窓をなぞる。
気付いているのだろうか。秋吉の顔は今にも泣きそうに歪んでいた。

「ねえ、あきちゃん。へいき……?」

「ん? 何が?」

「苦しくないの?」

時雨の言葉にも秋吉は首を傾げるばかり。自覚はないようだ。時雨は溜め息を吐く。

「もういい? 行こう。授業始まるよ」

「あ、うん」

秋吉は時雨に手を引かれ、渋々その場を後にする。もう見えない御影の面影を探すように目を閉じた。

親衛隊の仕事は3つある。

放課後の定期集会と、見回り、親衛対象の補佐だ。

御影は補佐が結城に決まったため、専ら仕事は放課後の定期集会ばかりだった。

「何か報告はありますか?」

放課後、空き教室を借りて親衛隊を集める。二クラス合同で行う授業の際に使う教室が埋まるほど、隊員が所狭しとひしめき合っ

いた。

御影は全校生徒の前に出ることも多いし、カリスマ性も持ち合わせている。有名どころに人が集まるのは当然と言えようか、会長の親衛隊は一番の規模を誇っていた。

教室中をぐるりと見回し、隊員の中から手が挙がる気配が無いのを確認して秋吉は締め言葉を発表した。

「無いようですので、これで解散とします。次回は来週の水曜日です。よろしくお願いします」

そう言うと秋吉は力つきたように教卓の傍に置いてあった席に座り込んだ。

集会が終わった後はそれぞれ少人数で固まり、情報収集にいそしんでいた。三学年が一堂に集まる貴重な日だ。下級生たちはより詳しい話を聞こうと仲のいい三年の隊員に声をかけていた。

「ねえ、隊長。顔色悪いよ……？」

「ん。……大丈夫」

いち早く、というか、人々の輪に入らなかった時雨が秋吉に近づく。

ぐったりと椅子から立ち上がる気配も見せない秋吉に、彼は心配そうに声をかけた。

「何一人だけ傷付いたみたいなの顔してるの？」

「御影様はあんたのものじゃないんだからね」

他愛もない話し声に紛れて響く中傷、妬み、嫉妬。負の感情に当てられて、秋吉は反応を返すことはできない。秋吉は二年。隊員は

三学年。下級が長をやることへのやつかみは仕方の無いことだろうか。

「悲劇のヒロインぶっちゃって。補佐になった美晴だってどんな手使ったんだか」

「他の候補の悪口を言って、御影様に自分を補佐にするように言っ
たみたいじゃない？」

「いくら仕事が出来るからって、先輩の悪口を言いふらさなくても
ねえ？」

「うわー。最低」

出所の分からない声。誹謗。中傷。

秋吉や時雨、美晴のことも槍玉に上がる。非難の嵐に晒されるが、
秋吉は決してそこを動こうとしない。

不満は聞いて置かなくては円滑な活動にはつなげられないと考
えているからだ。だが、他の者までも槍玉に上がるのはよろしくない。

「僕への不満はいくらでも言ってもらって構いません。ですが、他
人の悪口は、言い触らすものではないでしょう。不満と文句を一緒
くたにしないでください」

凜と響く声に教室が一瞬、水を打ったように静かになる。

しかし、それも束の間。また、雑談と誹謗中傷が交じるカオスが
戻ってきた。だが、話しの内容は前と異なり、秋吉以外の悪口はほ
とんど聞かれなくなった。

時雨が溜め息を吐く。悪口を言っていた隊員に対するものではな
い。秋吉の対応の仕方に呆れ返っていた。

（わざわざ煽るような事言わなくてもいいのに……）

時雨だって二年で、福隊長を勤めている分やつかみもまた必然だ。悪口には慣れている。わざわざ、攻撃の目を自分だけに向ける必要はないのだ。と秋吉に言っただけだった。

だが、先に秋吉に声をかけたのは、これもまた渦中の人物だった。

「秋吉先輩。無理しないでください」

「……結城くん」

一年で補佐になった手前、隊員内でも扱いに困っているのだろう。持て余されるようにぽつんと残された彼はそれに逆らわず真っ直ぐに教卓へ向かってきたのだ。

制服が汚れるのも構わずに結城は秋吉の前に膝をつく。

「あなただって本当は俺のこと憎んでいいんですよ」

「どうして……」

「だって、あなたから御影先輩を奪った」

「違う。君は御影様選ばれた。ただ、それだけ」

秋吉は背もたれに体重を預け、重力に負けそうな頭をどうにか結城に向けている。もう、見ている方も限界だ。

早く休んで欲しい一心で時雨は秋吉に声をかけた。

「ねえ、もう帰ろう？」

「ダメ。まだ、終わってない」

そこから聞こえる声に耳をすませる。悪評の中には根拠のないものもあるだろうが、秋吉は全てを飲み込むように、目を閉じた。

「倒れちゃうよ」

「大丈夫だよ。時雨ちゃん。……ごめんね」

それ以上はもう、届かないのだと、一方的な拒否を突きつけられ、時雨は言葉を失った。

「……っもう、…もがつ!? むぐっ。むー!」

息を吸い、決定打を秋吉に叩きつけようとしたそのとき、後ろから口をふさがれ、時雨は間拔けな声を上げることになった。

そのままずるずると引きづられ、廊下の隅で邪魔者と対峙した。

「なんで邪魔したの、美晴」

響く声は秋吉に対するものと違い、含ませた棘が隠されることなく晒されている。

「……随分変わりますね」

「当たり前。あんたに使う愛想は持ち合わせていないんだから」

っん、と顔をそらして、横目で結城を睨みつける。中性的な顔立ちの所為で迫力が出ないのは知っていたが、それでも睨まない訳にはいかなかった。目の前の男が原因の一端を握っているのだ。

彼には時雨の睨みなど効いていないのだろう。結城はひょいと肩をすくめると時雨をたしなめた。

「時雨さん、あれは言っちゃダメです。秋吉先輩の味方がいなくなっちゃう」

「あんたがなればいいじゃない? 藤堂秋吉親衛隊副隊長さん?」

「隊長はあなたでしょうか」

「だって、……なんであんなに頑張るの? そこまで頑張ることないじゃない! 目を塞いだって、耳を塞いだっていいのに! もう

あんなあきちゃん見てられないよ……。美晴は補佐になっちゃうし、僕はどうしたらいいの？」

「すみません。補佐を全員追い出したら、秋吉先輩が補佐になると信じてるバ会長見たら止まらなくて」

そう言うのと、時雨は元々大きな目を更に大きくさせ、そして、溜め息を吐いた。

「はあ？ そんなこと考えてたの？ どうりで、なんかおかしいと思った」

「俺が補佐になるしかないでしょう？」

「それはそうだ。……でも、その所為であきちゃんは更に痩せちゃった。意外とショックだったみたいだよ。あんたと会長の仲むつまじい姿が」

「補佐になんかならなきゃよかった……」

「しょうがないでしょ？ もう」

「……そうか。申し訳ないこと、したな」

振り返って出てきた教室を振り返る。秋吉はまだ、あの教卓の前で身動きもせず黙って誹謗中傷の嵐を受けているのだろう。

「だからと言って今までと態度変えたら殺すからね。あきちゃんが気付いちゃう」

「相変わらず、秋吉先輩最悪ですね」

「当たり前」

そういつて、時雨は得意げに鼻を鳴らした。

「二人共、鍵閉めちゃうけどいい？」

いつの間に終わったのか、チャリリ、と鍵の音を響かせて秋吉は時雨たちに声をかけた。

「うん、うん、大丈夫だよ。隊長。平気？」

血の気のない顔を心配そうに時雨が撫でる。

瞳は澱み、うつすらと隈も出来ている。

ふとした瞬間に何かが切れてしまいそうだ。無理やりにでも、どうかして休ませたかったが、それを秋吉は望まないだろう。分かっているだけに時雨は唇を噛むことしかできなかった。

秘密の花園 (Side 生徒会長親衛隊 (後書き))

次回は水曜日です。

キ印のお茶会 (Side 生徒会会計)

美しい庭園に美しい人、道化な自分。お茶会を開くメンバーとしてはまるで「不思議の国のアリス」のようだ。

「狂ってる訳ではないけどね」

「……え？」

「ううん、こっちの話」

日当たりの良い中庭。アンティーク調のガーデンテーブルの上に揃いのティーセットを並べ、優雅にお茶会を開くのは生徒会会計の平塚鉄心と御影利春生徒会長親衛隊隊長、藤堂秋吉だ。

秋吉手製の紅茶とお茶請けで午後のティータイムを楽しんでいた。

「また痩せたでしょ？」

「そうですか？」

「細くなった気がする」

顔に出ない質なのか、顔立ちは僅かにほっそりしただけであったが、ワイシャツの襟や袖から覗く身体は簡単に手折れてしまいそうに細い。

「それに、疲れてるでしょ？」

「……？」

「紅茶。カモミールの匂いにする」

「ふふ、平塚様の為ですよ。昼間なので少量にしたのですが、気になるますか？」

「気にはならないけど、呼び方」

「……テツ様」

「そお」

「平塚様」などと距離のある名前と呼ばれたくなかった。御影はそれに甘んじているようだが、それを許したら最後、秋吉との距離はそれ以上縮まない。それが、嫌だったのである。

「……テツ様、御影様はお元気ですか？」

「確かめに来ればいいのに。どうしてオレに聞くの？」

秋吉が生徒会室に来たがらないことを知っての質問だ。我ながらタチが悪い、と鉄心は内心苦笑いを浮かべた。

答えはきつとなにがしかの屁理屈だろう、と思ったが返ってきた反応は予想に反し、至極簡単だった。

「あんまり、会いたくないです」

「なんで？ カイチヨーのこと好きでしょ？」

重ねて問えば、秋吉はぱちぱちとゆっくりまばたきをした。問われた内容に疑問を感じたようだ。

「好き、というか、お慕いしておりますが」

「何が違うの？」

「ご迷惑かけてしまいます」

「カイチヨーは気にしないと思うよ？」

「そうじゃないんです」

秋吉の遠慮は新しくできた補佐の存在や御影の家から来るものだ
と思っていたが。

「なんか違うみたい」

何も装わない風で紅茶を飲む姿は、遠慮をしているようには見えない。

「僕は、あの方の傍にいたら駄目なんです」
「どうして？」

そう問えば、秋吉は僅かに眉をひそめた。失言だったのだろうか？しばらく口をつぐみ、何やらを思案して彼はようやく口を開いた。

「……あの方は「御影」です。僕じゃ、不釣り合いでしょう？」
「ホントは違うんでしょう？ 家の事を気にしてる顔じゃなかった」
「そんなことないですよ。あの方はいずれ嫁を取り、家族を作って、子供を育てていく。若気の至りとはいえ、同性の恋愛など、誉められたものではありません」

「それはオレにも言えるよね？」
「いいえ、僕個人の考えです。テツ様にも、もちろん御影様にも強要するつもりはありません」

「でも、今言ったじゃない？ 誉められるものじゃないって」
「僕は、と言っているんです。御影様が決めたのであれば、僕に御影様を止める権利はありません」

「じゃあ、ほんとうに、あっきーがカイチョーの傍にいたくないのは家の所為なの？」

「そうです」

「ほんとうに？」

「やけに食い下がりますね」

「ふふん、諦め悪いのよ」

「何か他に理由があって欲しいんですか？」

どこか楽しむように、秋吉は鉄心に尋ねた。彼が普段身にまとう悲壮感は見られない。まだ奥があるような気がしてならなかった。

「何か隠してそうなんだよねー」

「隠していたら駄目ですか？」

「そこまでは言えないね」

鉄心はガーデンチェアに寄りかかり、腕を組んで唸った。

何か、こう、隙を突ければいいのに、と秋吉を見る。

「あ、カイチヨーだ」

「っ……………!!」

嘘である。

秋吉は鉄心の視線を追うように慌てて立ち上がり、誰もいないことを知るとほっとしたような後悔したような顔をして椅子に座り直した。……少なくとも、御影がいなかったことを残念に思っているような顔ではない。

そして、その表情の変化を鉄心が見逃すはずもなく、秋吉もそれを知っているからこそ、観念したように肩を落とした。

「カイチヨーに会うのが怖いのか？」

「……」

「ごめんね。これしか思い浮かばなかったんだ」

「嫌いです」

「オレは好きだよ」

「……」

「どうして怖いのか？」

不謹慎ではあったが、ドキドキしながら鉄心は、秋吉の答えを待

った。ため息を吐いて俯いた顔に、いつもの凜とした親衛隊隊長の姿はなかった。

「あの方は、眩しすぎます」

「眩しい……？」

「太陽と同じです。存在しなければとても困ります。けれど、直視しようとすれば、放つ光の強さに目を焼かれてしまいます。……こんな、重いでしょう？」

確かに。とは思ったが、口には出せなかった。それくらいは程度をわきまえている。

「補佐は、そうは言っても御影様と同じ立場に立てないようでは話になりません。僕では駄目なんです。務まりません」

「なるほど、納得。補佐候補の中にあっきーの名前が無かったのはそういう訳があったんだね」

沈黙。

相手のことを太陽だと思うのは、まるで一昔前のプロポーズの言葉のようだ。しかし、それほどまでに相手の存在が大きすぎれば、近寄ることさえはばかれる、とそういうことなのだろう。

「僕は、寄りかかりたいだけなんです」

「……え？」

「今日はもうこれでお開きにしましょう。しゃべり過ぎました。本当は誰にも知られたくなかったのですが」

「オレは聞けて良かったけど」

「御影様には内緒にしていってくださいね」

「分かってるよ」

ティーセットを片付けた秋吉は、じゃあ、お願いします、と声を掛け、中庭を去っていった。

後ろ姿を見送った後、鉄心はガーデンチェアにもたれ掛かり、空を見上げた。

「テツさま」

「ぬーん？ ……お、舞華だ」

背後からかけられた声に、緩慢に鉄心が振り返ると視線の先には一人の生徒。彼も秋吉に負けず劣らず線が細く、また、上品な雰囲気をも醸し出していた。鉄心は彼を舞華と呼び、おいでおいでと手招いた。

近寄った舞華の腰に腕を回し、腹に顔を埋めてすん、と息を吸う。心地がいい。

「聞いてたの？」

「ええ、まあ。あなたの親衛隊ですし」

「あんなに重く考えてるとは思わなかった。一回でもいいから、甘えればいいのにね。こうやって」

すり、と寄せられる頭の暖かさに舞華は少しだけ、目を細めた。

鉄心は親衛隊に対して遠慮がない。相手が嫌と言わない限りは好きなように甘えるようにしていた。

親衛隊の彼らからは嫌と言われたことなど一度もないし、これくらいもないだろうけど。

舞華は鉄心の柔らかい髪をそっと梳いていた。

「テツさまは藤堂さんをどうしたいんですか？」

「幸せになって欲しいなあ」

「幸せにする、とは言わないんですね」

「あつきーにはカイチョーがいるし、オレには舞華がいるからね」
「僕はあなたの恋人じゃないんですから、テツさまのやりたいようにやってくださいっていいんですよ？」

「いいよ。あつきーの一番はカイチョーだもの」

ぎゅう、と舞華を抱きしめる腕に力を込め、鉄心は再び舞華の腹に顔を埋めた。

「テツさま、お部屋に戻りましょう」

肩を撫で、慰めながら舞華は鉄心を立たせた。

舞華はこうして触れ、傍にすることを望んでいたが、秋吉はそれを拒んだ。

親衛隊長の仕事はこなしているようだが、こうして、傍で支えることも立派な仕事だ。それを放棄したとも取れる秋吉の行動は舞華にとって不可解だった。

「ああ、だからこそその補佐なのか」

見かけたことのある会長とその補佐の仲むつまじい姿を思い出し、あれは隊長の代わりなのだ、と理解した。

「損な性格……」

「ん？ 舞華？」

「なんでもありません。行きましょう」

手を取る。暖かく、愛おしいそれを、自分ならば絶対に離しはしない、と心に誓って舞華は前を見つめた。

キ印のお茶会（Side 生徒会会計（後書き））

次回は土曜日です。

がぶ飲み睡眠薬 (Side 親衛隊)

「また、飲んでる……」

机の上に散らばる錠剤の殻をみつけ、時雨はため息を吐いた。

頭痛薬と睡眠薬。その組み合わせは身体に悪くないのだろうか。何があったかは知らないが、殻も片付けられないほどの何かがあったのだろう。

秋吉は何も言わないし、言おうとしない。よっぽど強く問い詰めない限り口は開かない。

その所為で、彼のクラスメイトからも何を考えているか分からないと言われている事を知っている。

実際、時雨にも秋吉の考えは分からなかった。

辛くなるように、辛くなるように行動しているように見えた。正直、不可解だ。

リビングから続く扉の片方を小さくノックをして静かに開ける。

秋吉のプライベートスペースだ。

静かに扉を開けたのは、秋吉を起こさないためであって、不法侵入しようと思った訳ではない。あしからず。

また、親友兼ルームメイト兼親衛隊長の身として、時雨は秋吉の体調を人一倍気にかけていた。

白と青のコントラストで統一された室内は、リラックスというより肌寒さを感じさせる。

奥のベッドの上にこんもりとした塊が見えた。秋吉は猫のように丸まって寝るのが常だった。

「なんか、寝てる間も苦しそう」

眉間に皺を寄せて目を瞑る秋吉の寝息は穏やかだが、見た目には穏やかとは言い難い。

「やっぱり、無理してるよね」

ため息を吐いて時雨は部屋を出た。

リビングで一人。愛用のカップにチャイを作って、ちびちびと飲む。どうしても自室に入る訳にはいかなかった。秋吉が起きたときに一人だとしたら、何をしでかすか分からなかったからだ。

本を読んだり、テレビを見たり、宿題を広げて見たり。時折秋吉の部屋の扉を見るが、動く気配はない。静かだ。

いつの間にか時計の針は7時を指した。それでもそろそろ起こさうか、と腰を上げたその時、秋吉の部屋から、何かが落ちる音と何かが倒れる音が立て続けに起こった。

「……あきちゃんっ！」

慌てて扉を開けようとしたが、それよりも前に扉が開かれ、秋吉が飛び出してきた。

時雨の目の前を通り過ぎ、トイレにたてこもる。えずく声だけが悲痛に響き、時雨は不意に泣きそうになった。

しばらくして開かれた戸の前には、血の気のない顔をした秋吉の姿があった。

「あきちゃん、座ろう」

秋吉の手を取って、時雨がソファへと導く。秋吉はされるがままだ。視線は下を向き、時雨と視線が合うこともない。

ソファに座らせると、秋吉の本日の紅茶を入れてやった。秋吉自身も自分が追いつめられているのが分かっているのか、カップからは仄かにラベンダーの香りが漂ってきた。

「飲んで」

カップを手渡すと、秋吉はゆっくり口を近付けて飲んだ。

「何があったの？」

「……晒された。あの人、嫌」

全く要領を得ない。親衛隊の悪口も言ったことのない秋吉が人を嫌うのは珍しかったが、それが誰のことを指すのかは時雨には検討も付かない。

睡眠薬の名残なのか、未だに秋吉の目は鈍く澱よどんでいる。

「ご飯、どうする？」

「いらない、かなあ」

「食べなきゃ薬も飲めないよ？」

「うーん、……そうか」

俯き、頭をゆらゆらと左右に揺らして秋吉は唸った。

「大丈夫……？」

「大丈夫。あの人は約束は守る人だから」

「ええと、そうじゃなくて。……気持ち悪いとかない？」

「まだ、ちょっと。さっき吐けなかったから」

「じゃあ、消化の良さそうなもの作るね」

時雨はそう言うど勢いよく立ち上がり、部屋に戻るとエプロン片手に戻ってきた。

「あきちゃんは座ってて。気持ち悪くなったらすぐ言てね」
「……ん」

腕まくりをし、張り切ってキッチンへ移動する。

二人の部屋のキッチンには、秋吉がオリジナルの配合をするための紅茶の瓶と、凝り性な時雨の使う様々な調味料の瓶が並べられていた。

時雨は慣れた手付きで料理を作っていく。

他の親衛隊ならば食堂に生徒会役員を見に行くのかもしれないが、生憎^{あいにく}二人にそのような習慣はない。

元々、秋吉は食事中に騒ぐのを良しとしない。それでも一目でも会長に会いたい隊員たちの為に、見に行く際に騒がない事、生徒会役員に迷惑をかけない事を徹底させた。

「ま、僕たちが食堂行ってもすごいんだよね」

秋吉は守ってあげたくなる系、時雨はツンデレ系、とそれなりのファンがいる二人としては、食堂はもはやゆっくり食事をする場所ではなくなっていた。

「できたよー」

二人分の食事をテーブルに並べ、時雨は秋吉を呼んだ。

時雨の声に反応してのっそりと身体を起こす様は、やはり具合が悪そうに見えた。

「少しでもいいから食べてね」

醤油ベースに鮭ブ레이크と溶き卵を加えたおじやだ。後乗せで三ツ葉を載せて完成の簡単なもの。おかゆに近い分食べやすいだろうと思つてのチョイスだった。

茶碗に盛ったおじやを前に、秋吉はゆっくりとレンゲを手にとつた。

もともと食べる様はまるで小動物のようで、時雨は自分が料理を作れて本当に良かったと実感した。

「時雨ちゃん……？」

箸も動かさず、自分を見つめる時雨が不思議に見えたのか、秋吉はこてん、と首を傾げて時雨を見つめ返した。

「あきちゃん。なるべく一人にならないでね」

自分の容姿に無頓着な秋吉に、時雨は思わず零れるため息を隠しきれなかった。

「……なんで？」

「危ないから」

まだ分からないような顔をしている秋吉を放って、時雨は自分の分に箸を付けた。

食事が終わった秋吉は寝る準備を全て整えてから、睡眠薬をリビングのテーブルに出した。

規定の三粒を一つずつ丁寧に口に運ぶ。飲み下す度に喉仏が上下し、時雨はそれをぼんやりと見つめた。

「ごめん。先に、寝るね」

「うん、分かった。何かあったら、何時でもいいから、起こしてね」

若干の間の後、秋吉は緩慢に頷いてみせた。それに少しの懸念を抱きながら、時雨は黙って秋吉を見送った。

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

ひらひらと手を振って自室に戻る秋吉は随分と顔色が戻っていた。明日になったら、全部良くなっていればいいのに、とキリの無いことを思いながら、時雨は残った片付けを始めた。

がぶ飲み睡眠薬（Side 親衛隊（後書き））

次回は水曜日です。

なんてったってアイドル（Side 生徒会

「あの、……俺も役員席いかなきゃいけないんですか？」

仕事なが引いた時点で結城は嫌な予感がしていたのだ。

「なんだ、不満か？」

一応の上司である御影の不遜な態度にため息が漏れる。

元から持て囃される立場の人間には、凡人の気持ちなど分からないのだ。まして、結城は親衛隊である。

「不満とかじゃなくてですね。後が怖いというか」

「どういうことですか？」

「や、いや。『俺』がいるっていうのが悪いというか。……あんまり言くと告げ口っぽくなっちゃうんで、これで勘弁してくれませんか」

俺、の部分若干強調して副会長に訴えた。勘の鋭い彼なら分かるだろう、と見込んでのことだ。

「ふうん？ 抜け駆け禁止ってことですか」

「……そんなとこです」

「『あの子』がそれを言うとは思いませんか？」

「あの人は関係していません」

「そうですか。まあ、そんなことでもいいとして、食堂に着きましたよ」

そういえば。結城の目の前には大きな食堂の扉。

回れ右即ダッシュは阻止され、捕まれた襟首に息が詰まる。

「そんな面白そうなこと、僕が見過ごす訳ないでしょう？」

襟首を捕まれたままずると引きづられ、抵抗虚しく鉄心と英
が開けた扉を通らされた。

途端に響く悲鳴、歓声。

生徒会の人気がどれほど分かるだろう。両手で耳を塞いでも声
は聞こえてくる。

結城は肩を落としてため息を吐いた。

「副会長……、逃げないので離してくれませんか」

やっと解放されて、よれた襟元を整えた。

その最中も歓声は止まない。

まあ、それなりに静かな所も点々とはあるがかなり少数だ。

そんな中、御影がずっと手を上げるとぴたりと歓声が止む。

その辺りはよく教育されているというか、それが身についてしま
っている。現生徒会の面々も去年までは「あちら側」にいたのだ。

歓声を上げたことは一度もなくとも、生徒会長が手を上げれば自然
と口を閉じた。

「応援もありがたいですが、食事中は適度な声量でお願いしますね」

御影の静めた観衆に向けて椿がにこりと微笑んでみせる。

食堂らしい賑やかさになった所で面々は入り口付近の階段を登っ
ていった。二階は食堂の調理室部分の上に席が設けられ、手すりが
ガラスで出来ているため一階の様子が良く見えた。

その席を特別好んだのが、何代か前の生徒会長だった。一般生徒
の様子が良く見える、と昼食は専らその席に座っていた。その様子
が名物となり、いつしかそこは暗黙の了解の下「生徒会席」と呼ば

れ、更に昼食後に各委員会の長たちと軽い打ち合わせをしたこともあって、二階席はいつの日か「役員席」と呼ばれるようになった。

「本当は誰でも座ってよかったんですけどね」

一応、今年の生徒会としては二階席の開放を宣言していたが、長年染み付いた癖なのか、二階を使用する生徒は少ないようだ。

空いた席が目立ち、もちろん「生徒会席」も空いている。

「俺たちも下に座ったっていいんだぜ？」

「嫌ですよ。僕らの周りだけ綺麗に席が空いたのは忘れません。実は避けられてるんじゃないかと思いました」

「そうなんだよな。どうも、俺たちと『あいつら』の間には溝みたいな壁があるよな」

「仕方ないよお。俺らも先代には気が引けるもん」

会話の間に注文を済ませ、面々は生徒会室にいる時のように、各々気を抜いた。

御影は腕を組んで背もたれに寄りかかり、鉄心はテーブルに腕を投げ出して突っ伏している。

後の二人は「いつも通り」姿勢良く座り、結城はいつもより少し固くなっていた。

「緊張してるのお？」

「……嫌な予感しかしません」

「君はそう言いますが、階下では君への悪口は聞こえませんでしたね」

「あー、そういえばそうだねえ」

思いの外早く来た食事を受け取りながら、会話は途切れることな

く続いていく。各々挨拶をして箸を付ける。時間は無限ではない。

「ああ、知らないんですね。うちは食堂では騒がないように言われているんです。いつも忙しい方々だから食事ぐらいはゆっくりとってもらいたいって。だから熱い視線は送っても声は上げないのが大半です」

階下で見かけた三年の隊員の顔を思い出し、結城はため息を吐いた。

確実に目を付けられた。

「あいつも来てるのか？」

「いえ、隊長は来ません」

期待がこもった会長の声を結城は容赦なく切り捨てる。彼にとってはいつものことでも、会長にとっては初耳だ。険しい視線を送ってくる会長にうんざりし、行儀が悪いと分かってはいたが箸を茶碗に突き立てた。

「言い切れるのか」

「隊長のファンも多いですから、落ち着いて食事を取る所じゃないんでしょう」

廊下を通るだけでも視線が集まるのを知っている結城はため息混じりに言った。秋吉がいない食堂など意味がない。それ故、結城は食堂を利用したことはほとんどなかった。

「会いたかったですか？」

「……当たり前だ。毎日でも会いたい」

臆面もなく言い放つ御影を見て結城は再度ため息を吐く。
さつきからどれほどの幸せが逃げたのだろう、と結城は内心で呟いた。

「そういうことは本人に言ってくださいよ」

「本人が捕まらないんだから仕方ないだろう」

不満だ、とばかりに鼻を鳴らし、御影は箸を動かす。
代わりに口を開いたのは鉄心だ。

「そういえば、結城くん。あつきー大丈夫？」

突然の問いに結城は返答に困った。

「この間、ちよつと無理させちゃったからねえ」

深読みをさせるような鉄心の言葉に食いついたのは御影だった。
眉間に皺を寄せ、手が出そうなのか握りしめた手が震えていた。

「平塚、……どういうことだ」

「そんなすごまないですよ。この間お茶したときに具合悪そうだったからさあ」

「元気、とは言い切れません」

結城は普段の秋吉と岬から聞く話を思い出しながらいった。

「表には出しませんが、あまり寝てないみたいです。それでも俺に話はほとんどきません」

「どうしてー？」

「俺に喋るところやってあなた方に話がいくからですよ」

生徒会に入り、親衛隊としての活動時間が減ったことも一因だが、御影に話が伝わるのを秋吉が嫌ったのが大きいだろうと結城は考えていた。

「僕たちはそんなに頼りないかな？」

ニヤリと椿は笑ってみせる。答えがノーであると知った上で聞いていた。タチが悪い。

「迷惑、かけたくないんですよ」

「なんでもないのにね」

「これで会長が隊長をかばったら、更に立場は悪くなります。余計なことはしないでくださいね」

「……ちっ」

「すみません」

「お前が謝るな」

舌打ちして顔を歪める御影を見て、結城は頭を下げた。

色々と原因はあるだろうが、結城が補佐であるこの状態も秋吉の立場が悪くなる一因でもある。

自ら、秋吉を追い詰めていることを思っと思わず唇を噛み締めた。

「発破、かけてみようかー？」

「テツ先輩……？」

「このままじゃ、なんも動かないっしょ？」

「そうは言っても、何するつもりですか」

「舞華に頼む。うちの可愛い良い子だよ」

そうと決まれば話は早い、と鉄心はトレイを持って颯爽と去って

いった。

「まだ、何も頼んでないです……よ」

言った所で声が届くはずもなく、結城が伸ばした手は力なく下ろされた。

「さあ、僕らも帰りましょう。休んでたって仕事は終わりませんよ」

丁度良い区切りでもあった。各々トレイを持って食堂を後に、生徒会室という戦場へ足を向けた。

なんてったってアイドル (Side 生徒会 (後書き))

次回は金曜日の深夜か土曜日です。

ヘビとマングース（Side 生徒会会計親衛隊

「ねえ、岬時雨ってこのクラス？」

女王様然とした態度で清洲舞華は言い放った。

まるで時が止まったようだ。

一様に自分の方を向いて固まる彼らを見て、舞華は思った。

「で、いるの？ いないの？」

「います！」

呆れを含んだ声にいち早く反応したのは、扉のすぐそばに立っていた男だった。

彼が指差す先には小柄で中性的な風貌をした男。つまり、岬時雨だ。

「君が岬くん？ ちょっと付き合ってくれるかなあ？」

舞華を見て、彼と同席していた生徒が顔を見合わせる。用事が岬宛てであることを不思議に思っているんだろう。

藤堂、秋吉。

本来ならば、同じ生徒会役員親衛隊長として、藤堂に用事があるはずだ。などと考えているに違いない。

「藤堂さんじゃなくて岬くんに用事があるの。いいよね？」

時雨は渋々頷き、席を立つ。その際に藤堂に向けて何かを言った。彼の方も大概線が細い。

風に吹かれれば飛んでいきそうな藤堂を見て舞華はため息を吐いた。

「行きましょう」

時雨の声に頷き、舞華は廊下に出た。放課後の静寂。空き教室のドアを開けて室内に人がいないか充分に確認した後、舞華は室内に入った。

ドアを閉め、一息。舞華は適当な椅子に座り、時雨は立ったままだ。

「不用心だね」

「……どういう意味ですか」

「罨だったらどうするの？」

「まさか！ 隊長に！？」

「しないよ。別に嫌ってる訳じゃない。君らの三年みたいにね」

緊張感が足りない、と時雨を見る。自分の所より身内に敵が多いと思うのだけど、この余裕はどこから来るのか。

「座らないの？」

「隊長を待たせています」

今更警戒心を見せた所で遅いのにと、舞華は小さく溜め息を吐いた。

「そう。つまらないの」

「それで何の用、ですか」

「分かっているんじゃないの？」

「……うちの隊長のことですか？」

「うちの隊長、ね。君が隊長でしょう？ 藤堂くんのね」

「知っているんですか？」

「なめないでよ。君らんとこみたいに守られっぱなしの隊長じゃないんだから」

ふん、と鼻を鳴らして舞華は笑う。

藤堂は、自分だけが不幸だと思いたいのだろう。

「あれがうじうじしてるとテツさまも寂しがるの。ぼくはそれが嫌別にテツさまと居るのをどうこう言うつもりはないけど……分かるよね」

「でも、隊長は……」

「隊長は、何？」

「会長とどうなろうとは考えていないです」

「別に藤堂さんの気持ちなんてどうでもいいの。御影様のお気持ちを無視するの？」

知らぬは当人ばかりなり。

御影が藤堂のことを気にかけていることは周知の事実だ。大方藤堂に対する誹謗中傷は嫉妬の類だろう。

「御影様の気持ちを無視しようなんて随分だと思わない？」

「僕が一番大事なのは隊長、……あきちゃんの気持ちですから」

「だから御影様の気持ちに気付かなくてもいい？ 無視してもいい？ それは本当に藤堂さんの本心なの？ 最後に後悔するのは誰？」

全く、過保護過ぎる。目隠しをして何も見ないように。周りが傷ついているのも知らせない。

彼がどれだけ大事か知らないが、それで何が変わるというのか。

「藤堂さんのこと一番に考えてくれると思ったから話したけど、なんだハズレくじだったね。結局、君も藤堂さんの上辺だけしか見てないってことだ」

「そんなこと……っ！」

「もういいよ。期待したばかりがバカだった」

がたん、と音を立てて立ち上がる。もう振り返ったりしてやらない。

「あきちゃんは何も言わないんです」

「それを上手く聞き出せるのは、親友の君しかないんじゃないの？」

応える声はない。精々悩めばいいんだ。

舞華は岬を一人で残し、空き教室を出た。

一応、藤堂の様子を見る為に教室の前を通ったが、彼の周りにはクラスメイトらしき人が何人かいた。藤堂を一人きりにさせない為の策なのか分からないが、余程愛されているらしい。

風貌の所為だとしても舞華はそれが少し羨ましかった。

「……報告がてらテツさまに甘えてこよう」

ぼんやりと眩き、舞華は教室を離れる。生徒会の仕事が終わ次第の報告になるだろうと、当たりを付けて鉄心にアポ取りのメールを送った。

夜9時。舞華は鉄心の部屋を訪れていた。

風呂上がり肩にかけたタオルで、豪快に髪を拭く鉄心をソファに座った舞華はぼうっと見上げていた。

「舞華、面白い？」

「いえ、……かっこいいです」

「しょーじきでよろしい」

鉄心は笑いながら、舞華の隣に腰掛けた。一層近くなる彼との距離に舞華は小さく唾を飲んだ。

「わんこはどうだった？」

「わんこ……、岬くんのことですか？」

「そう。あっきーの後ろに付いたり前に付いたり、警戒するときに『わんわん』って吠えるの」

「あまり、より良い返事はもらえませんでした」

「どういうこと？」

「あくまでも藤堂さんの気持ちを最優先させるみたいです」

「そう。なら、どうにかなるかな」

「なりますか？」

「なりますとも。あっきーはそうはいつでもカイチョーのこと好きだからね」

髪を拭き終えた鉄心はそのまま舞華に抱きついた。

いきなりのことではあったが、舞華は鉄心を抱き止め、暖かさにうっとり目を閉じる。

「舞華」

「……なんですか？」

「ありがとね」

「お礼には早すぎます。まだ、うまくいったとは限らないのに……」
「ううん、俺のわがまま聞いてくれて」

「当たり前です。ぼくはあなたの親衛隊ですよ？」

「そだね」

鉄心は舞華の肩に顔を埋めて呟いた。

彼が言おうとしていることはきつと別にあるのだろうが、舞華には関係のないことだ。

舞華は鉄心の親衛隊で、彼から頼まれたことなら、どんなことでも叶えようと奮闘するつもりでいた。

だから、藤堂がどうか、御影がどうかは今考えたく、なかった。

ヘビとマンガース (Side 生徒会会計親衛隊 (後書き))

いつも遅れてすみませんorz
次回は火曜日予定です。

シュレーディンガーの猫 (Side 生徒会)

「会長、そろそろじゃあないですか？」

椿は利春に向けて口を開いた。

「何がだ？」

「あなたはまだショーウィンドウに手を伸ばしてるだけだ」

そう言って椿は利春に手を伸ばした。触れそうに近付いたそれはもどかしさを感じさせる位置で止まった。

決して触れることはなく、しかし、確実にパーソナルスペースを侵害してくる。

利春は眉をひそめ、椿から離れた。途端に椿の手のひらは空を搔く。

「そう。この距離。意識せざるを得ない位置なのに、決して触れようとはしない。でも、離れた瞬間に名残惜しそうに手を伸ばされる。その繰り返し。秋吉くん、そろそろ愛想尽かすんじゃないんですか？」

「余計なお世話だ」

「早くしないと諦めちゃいますよ？」

「嫌いになるじゃなくてか……？」

「会長が自覚したのはつい最近でしょうけど、秋吉くんはそれよりも長く会長のことを想っていた。……そうですね？ 追いかけるのって結構疲れるんですよ？ 早く止めてあげないと走れなくなっちゃいます」

伸ばしていた手を引っ込め、窓の外に目を向けた。眼裏に浮かぶ

のは地元に残して来た恋人の姿。久しぶりに声が聞きたい、と椿は思った。

「実体験か？」

「……半分は」

ああ、会いたい。

とっさに胸を突く思いを椿は吞み込んだ。

「大体、駆け引きとか難しいことを考えるからいけないんです。自分から告白しちゃえばいいじゃないですか。ダメなんですか？ プライドですか？」

「……キャラじゃない」

「キャラじゃない！ そんなくだらない理由で秋吉くんを生殺しにしてきたと！ 秋吉くんを好きなあなたは『御影利春』であって『生徒会長』じゃない。分かってますか？」

椿は興奮して早口になる声を押さえることが出来なかった。

きつと、秋吉を自分の恋人に重ね合わせてしまったからだろう。椿と彼の恋人もまた、男同士で身分違いの恋だった。想いのベクトルは違えど似たもの同士ということだ。

「せっかく傍にいられるんですから、さっさとくっついていちゃいちゃしてください」

「いちゃいちゃって……」

「らぶらぶがお好みですか？」

「そういう問題ではない」

モウマンタイ
「なら無問題です」

気恥ずかしいのだろうか。頬を指先で掻く利春の視線は甘い。二

人がくつついたのなら、存分にからかつてやろうと椿は心に決めた。

「相手の気持ちなんて、あれこれ考えててもしょうがないでしょう。箱を開けてみない限り、猫がどうなっているかなんて誰にも分からないんですから」

「シュレーディンガーの猫か」

「ご名答。さすがは生徒会長、博識でいらっしゃる」

大袈裟な態度でお辞儀をしてみせれば、利春は呆れたように笑った。いつもの調子に戻ったことに安堵してやっと椿も心からの笑みを浮かべることができた。

さて、と振り返れば鉄心の頭が見える。

「鉄心くん、秋吉くんに発破はかかりましたか？」

純粹に疑問に思っただけ聞いてみたというのに、この態度は何だろう。慌てて顔を上げた鉄心は不用意にあちこちを触り、書類をばらまいた。

「何かやましいことでもあるんですか？」

「ちがつ、そ、そうじゃなくて……」

「平塚、」

利春が呼んだことで冷静さを取り戻したのか、脱力するように机に突っ伏した。

「舞華にはわんこ……、えっと時雨ちゃんの方を当たってもらったんだけど、時雨ちゃんはある……の気持ちを最優先するって。だから、やっぱりあつき……次第になっちゃった。ごめんなさい」

「ほら、やっぱり箱は開いてみなければ分からない」

「そうだな……。ともかく会わなきゃ始まんねえか」

「そうですね」

鉄心はしゅんと肩を落とし、御影は腕を組んで暫し考え込んだ。選択肢はそう多くはない。お互いの立場を考慮しなければいけない点が唯一厄介な所か。

「呼ぶしかないか」

「会いに行かないんですか？」

「個人的に会いにいけば、あいつの立場が悪くなるだろう。でも、親衛隊としてなら、まだ顔を立てとける」

模範解答だろう。一般生徒であれば、さっさと会いに行って告げてしまえ、と焚きつけられたかもしれないが、片やみんなのアイドル生徒会長、片や上級生たちの目の上のたんこぶと見なされている親衛隊長。個人的な用向きで逢瀬をしたとなれば、秋吉に対する風向きをいたずらに強くするだけだ。

仕事にかこつけて呼ぶのは誉められたものではないかもしれないが、有効手段はこれしかない。

「それが、一番いいでしょうね」

「よし、そうとなれば明日、早速呼び出すぞ」

そう利春が宣言したときは、まさかこれが長期戦になるとは思っていなかった。

シュレーディンガーの猫 (Side 生徒会 (後書き))

すみません。今日二つ上げます。

ハリネズミのジレンマ (Side 親衛隊)

「なんであいつが来ないんだ」

僕に聞かないでください、と何度思ったか。

時雨は御影の前で居心地悪そうに身をすくめた。

「はつきりとは言いませんけどね。嫌って言うんですから仕方ないでしょう」

「なにが嫌なんだ」

「知りませんよ。あんまりしつこいと嫌われますよ」

最近は何故か、御影からの親衛隊の呼び出しが増えた。いつもならば隊長である秋吉が行くべきである。しかし、この頃の秋吉は毎回何やらの理由を付けて呼び出しを拒否した。その代役を務めるのは副隊長の時雨である。

呼び出しとは言っても何も特別な用事があるわけでもなく、ただ単に開き直った御影が秋吉を呼び出すためにしているだけらしい。本人が出てこないで収まりがつかないのだ。

「秋吉先輩だって忙しいんです」

美晴がそうやって庇うが、それが多分、秋吉が生徒会室に来れない理由かもしれないと思った。

「補佐の具合はどうですか？」

「ああ、ちょうどいい。細かい所にも気が付くしな。重宝している」
「そうですか。それは良かった」

きっと、御影は気付いていないだろう。そうやって美晴を評価することが秋吉を追いつめることになるなど。だけどそれは秋吉にとっては心外で、本意なはずだ。だから、時雨は何も言わない。言えないのだ。

「特に用事はないですね？」
「ちょっと待て」

形だけの確認をし、帰ろうと踵を返せば後ろから声をかけられ、時雨は足を止めた。渋々である。

「……何ですか」
「引きずってでもいい。連れて来い」
「無理やりなんて、僕が了承すると思ってるんですか？」

睨み合う。

秋吉のことが無ければ、生徒会長でもあり、先輩でもある御影と睨み合うことなんてなかっただろう。

今だって、正直怖いのだ。
しかし、時雨は秋吉の為に今ここで退くわけにはいかない。

「今のままじゃどうにもならないんだよ。無理やりにも、俺はあいつと話さなきゃならない」

「……直接行けばいいじゃないですか」
「あいつの立場、お前も知ってるだろう？俺が行ったら余計に辛くさせる。それじゃ意味がない。あいつを連れて来れるのはお前だけだろうし、あいつが逃げない為の壁が必要だ」

「僕に悪者になれって言うんですか」

思わず、俯いた。

いつだって、秋吉のことを一番にしたいのに。

「オレが行こうかー？」

「ダメだ。お前は甘やかす」

平塚の立候補も電光石火の勢いで御影は一刀両断する。

「説得して欲しい。もう一度、話したいんだ」

そういうと、御影は時雨に向けて頭を下げた。

頭を、下げた！

天下の生徒会長が、一介の親衛隊員に向けて！

それほどまでに本気だと言うのか。

唇を噛む。確かに秋吉は我慢のし過ぎで、原因は分かりきっている。解決する為の材料は揃っていた。揃って、しまった。

時雨は決意を真とする為に深呼吸をし、腹にぐ、と力を込めた。

「……分かりました。説得しましょう」

顔を上げると、笑った御影と目が合う。人を食ったようないつもの笑みではなく、どこかこう、見ていて恥ずかしくなるような微笑み。

「ありがとう」

ああ、これは慈しみなのか。

秋吉にまた会えることがそんなに嬉しいのか！ ……嬉しいのだから。

負けたな、と時雨は呟き、肩の力を抜く。

想いに勝ち負けなど有り得ない。元々感情のあり方が違うのだ。

しかし、強さでは勝っていたはずだ、と時雨は勝手に思い込んでいた。

いつの間にか追い越されてた……。

娘を嫁に出すってこんな気持ちだろうか、と時雨はそっと息を吐いた。

「近い内に必ず、連れてきます」

とはいえ、そのまま言ったのでは秋吉は首を縦には振らないだろう。

どう言ったものか……。

部屋までの道すがら、考え考え廊下を歩く。

いつもの習慣でカードキーをスライドさせると手応えがない。

鍵が開いているようだ。部屋に入ったらともかく鍵をかけるようにしている二人には到底有り得ないことだ。

背筋が凍る。

押し入られているのだとしたら、倒れているのだとしたら、自分一人で対処できるだろうか？

指先に力が入らない。息ができない。

震える手でドアノブを捻った。

「あきちゃん……？」

トイレ、風呂場、一つずつ確認をしながら先へ進む。

リビングに入った所でソファの上にうずくまる身体を見つけて時

雨は悲鳴のような声を上げた。

「あきちゃん！ 大丈夫！？ 何があったの！？」

「……親衛隊、やめたい」

「っ！？ 何かされた？」

「ううん」

「じゃあ、どうして？」

腕に手をやって身体を起こさせ、出来たスペースに時雨は腰を下ろした。

「もう、結城くんと仲良くされてる御影さまを見たくない」

「……あきちゃん」

「分かってる！ 僕が推薦したんだし、結城くんが優秀なのも知ってる！ 補佐だから傍にいるのは当たり前だし、そう望んだのは僕なのに！ ……なんで、こんなに苦しいの？ なんで、こんなに、結城くんを憎く感じるの？」

いつもの、楚々とした秋吉はいない。

こらえきれない感情はソファを叩く手に委ねられ、震える声は果たして、怒りからか悲しみからか。

荒れ狂う感情のままにソファを攻撃し続け、不意にぴたりと動きを止めたかと思うと、脱力し、ソファの背もたれに顔を埋めた。

「……みんなの、先輩たちの気持ち、分かっちゃった。そうだよ。自分たちは近付けないのに、当たり前前みたいな顔で傍にいればそこに正当な理由があったとしてもムカつくよね。あーあ、傍で見てるだけで充分だったのに」

「あきちゃん、御影さまに言わないつもり？」

「うん……。時雨ちゃんから言ってもらえばいいよ。後任は時雨ち

ちゃんにお願いするつもりだし」

「嫌だよ！」

「……勝手に、ごめんね」

「違うよ！　勝手に決めたからじゃないよ！　僕はあきちゃんが隊長だから、会長の親衛隊に入っただよ。あきちゃんがいなくなったら僕が親衛隊に残る意味なんてないんだ！」

埋めた頭を僅かに動かし、時雨を見上げている秋吉の、肩を掴んで向かい合った。

時雨の強引な態度に秋吉は目をパチパチと瞬かせた。

「あきちゃん、御影さまとちゃんと話をしよう。あきちゃんが今までどんなに御影さまに尽くしてきたか、どんなに御影さまを大事に思ってきたか、今はどんな気持ちで、御影さまと美晴を見ているか……辞めるんだったら全部吐いてスッキリしちやおうよ」

「でも、そんな愚痴ばかり、……御影様に嫌われたくないよ」

「それ、御影さまは違う風に捉えるかもよ」

「え……？」

「あきちゃんが御影さまを嫌いになったから、辞めるんじゃないかって、思うよ」

「そんなこと……っ！」

「ならちゃんと言わなきゃ」

必死に言い募ってやっと、秋吉の瞳に冷静さが戻ってくるのが見て取れて、時雨は胸を撫で下ろした。

「……分かった。御影様に会うよ」

「僕も一緒に行こうか？」

「うん、」

「そのときは美晴はいない方がいい？」

「……うん」

「分かった。行く日決めたら教えてね。美晴に言っておくから」
「お願い」

やっと、笑みを見せた秋吉にほっと胸を撫で下ろした。部屋の鍵が開いていたときの恐怖はまだ覚えている。

「何もなくて良かった。押し入られてるんじゃないかってヒヤヒヤしたよ」

「心配かけてごめんね」

「こういうときはごめんじゃなくて、ありがとうがうれしいな」

「時雨ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして。よし！ 安心したらお腹空いてきちゃった。あきちゃん、一緒に作ろう？」

秋吉に手を伸ばすと、すぐに握り返してくれるのが嬉しくて、ニヤニヤと緩んだ顔のまま時雨は手を繋いでキッチンに向かった。

久しぶりの穏やかな食卓。やっと吹っ切れた秋吉は顔色も良く、これから好転していく事態に時雨はわくわくと心を踊らせた。

「ねえ、時雨ちゃんって結城くんの名前で呼んでたっけ？」

「え？ ……あ、ああ！ あいつ、結構生意気でしょ？ だから、呼び捨てでいいかなって思ってた……？」

自分でも苦しい言い訳だと認めざるを得ない。秋吉には彼自身の親衛隊があることも、時雨と美晴が隊長と副隊長であることも内緒なのだ。その辺りのことは今回のことが解決してからにしたかった。

「そう？」

「そうだよ」

納得したかは分からなかったが、秋吉はそれ以上言及する事は無く、時雨はほっと息を吐き出して箸を進めた。

ハリネズミのジレンマ (Side 親衛隊 (後書き))

次回、最終回となります。予定は金曜日深夜です。

十人十色の幸せ (Side 生徒会長)

結局、まともに面会が叶ったのは、前回時雨に頼んでからゆうに2週間も経過した時だった。

音沙汰もなく過ぎてしまった2週間という時間は、思いがけずに強く、二人をためらわせていた。感情や勢いがすっかり殺がれてしまっているからだ。

今現在生徒会室にいるのは4人。

利春と秋吉の当人たち。それと利春の逃亡防止用に椿、秋吉の逃亡防止用に時雨だ。結城は別室で待機中で、鉄心と英は彼のお守り兼別件の対応中だ。

ソファに、向かい合うように座る。利春は腕を組んで後ろに寄りかかり、秋吉はズボンの太もも部分を握りしめて俯いていた。椿は肘掛けに頬杖をついて二人を観察し、時雨はきよろきよると落ち着きなく各々の顔を見比べている。

室内は重苦しい沈黙で満たされ、時雨と椿は元より、秋吉も、利春も口を開かなかった。

午後の穏やかな空気が窓の外には流れているというのに。利春は小さく舌打ちをした。

その瞬間、酷く怯えた顔でこちらを向く秋吉が視界に映った。慌てて顔を向けるが、秋吉は気まずそうに目をそらしただけだった。

「……あ、」

「全く、何やってるんですか」

溜め息と共に軽く睨まれて、利春はぐしゃりと乱暴に前髪をかき混ぜた。

「このままじゃ切りがないですね。僕たちはここにいますから、會長たちはあっちで話してください」

椿があっち、と示した先は資料室。代々の生徒会で使用した書類が納められている場所だ。特に機密を守らなくてはならない事はないのだが、一般生徒には使い道もないので、資料室への入り口は生徒会室にのみ繋がっている。

すぐには外に出れないので、逃亡防止役が見張っていなくても大丈夫、とそういうことなのだろう。

利春が立ち上がると、遅れて時雨に促される格好で秋吉も立ち上がった。

「ちゃんと向き合ってくださいね」

背に向けてかけられた声に利春は顔をしかめた。

資料室は埃とカビの混じる古本の匂いがする。

ぱたんと静かに閉じられる扉で秋吉も入ってきた事を知った。振り返れば珍しく秋吉が顔を上げていた。

「あのっ……!!」

「あのさ、……」

見事にハモった声に暫しの沈黙が落ちる。

利春がジェスチャーで話の続きを促すと、秋吉は小さく息を吸い、勢いよく、頭を下げた。

「今まですみませんでした!」

「……何がだ?」

何のことか予想は立っていたが、利春は話を促すだけに留めた。それ以上何も言わずにいると、タイミングを計っていたらしい秋吉が口を開いた。

「あ、の……、御影様の呼び出しに答えずにいたこと、です」
「ああ、あれか。拒否されているかと思った」

少しだけ、恨めしそうに言えば、秋吉は申し訳なさそうに眉を下げた。

「その、ことなんですが……」

彼がそう、いいかけて目を泳がせたことで、利春は違和感に気がつくべきだった。しかし、利春はそれに気付かず、その先を止めることはできない。秋吉は決意を固めたような真剣な目をして口を開いた。

「私は御影様の親衛隊を抜けようと思います」
「……は？　どういう事だ！　何かされたのか？　それとも何か言われたのか？」

思わず思い切り掴んだ腕が痛いのか、秋吉は顔を歪めた。
気付いてはいたが、利春は力を抜くことができない。親衛隊だから、いつでも会えるからと安心していった。秋吉が親衛隊をやめるなど、考えもしなかった。

「いいえ、私が自分で決めました」
「……理由を、言え」

ああ、何故自分はこんな言い方しかできないのだろう。

「私は、御影様の親衛隊として、御影様のお役に立とうと行動して参りました。私はあなたの影であればそれで満足だったんです。感謝されなくとも、御影様の糧になれていると思えば、それで満足でした。でも、今は……違います」

そこで秋吉は、徐々に高ぶっていった声を抑えるように深呼吸を一つした。

「見返りを求めるようになってしまったのです。私がどれだけ頑張ったとしても、あなたは私を見てはくれない。あなたが見ているのは結城だけ。分かっています。結城は御影様の補佐ですから、御影様が関心を寄せるのは当たり前です。でも、その当たり前が我慢出来なくなってしまった」

僅かに震えて響く声はまるで泣いているかのようだった。

覗き込んでみれば、秋吉の頬に涙は伝っていなかったが、瞳が膜を張ったように揺らいでいた。

思わず見惚れてしまい、慌てて利春は目をそらす。

「親衛隊の中には、見返りを求めている人もいます。一般の隊員であれば許される範囲でしょう。ですが、私は隊長なのです」

「見返りを一切求めないのは難しいだろう？」

正論とも言える利春の言葉に、秋吉は首を緩く振ることで否定を示した。

「親衛隊は元々私設団体であり、親衛対象と損益で結ばれている訳ではありません。勝手に作って行動しているのに、対象に見返りを

求めるなどおかしな話でしょう？」

「……俺は気にしないのに」

「1つ許せば要望は際限なく膨らみます。だから、隊長は絶対に見返りを求めてはいけない。他の隊員に態度で示すのです。……それができなくなった私は隊長失格です」

下を向き、手はキツく握り締められ、震えている。

「お前はしっかりやってくれてるよ。隊長失格だなんていうな」

辞めて欲しくない一心で秋吉に言った。それでも、彼の顔は下を向いたまま、利春と目が合うことはない。

「ダメなんです」

きっぱりと言い切った秋吉との間に壁を感じた。拒否されているような気分になり、利春は秋吉の腕から手を離れた。

いつも感じていた遠慮や立場からくる壁、溝、段差。

利春と同じ土俵に立とうとしない秋吉はある意味、卑怯なのかもしれない。

「お前はもう、俺のことは嫌いか……？」

意地悪な質問だとは分かっていた。自身の親衛隊、しかも隊長である秋吉を信頼していないともとれる内容だ。だが今、彼の利春への親愛は確信が持てない。これで、嫌いになったと言われれば、利春になす術はないだろう。

自分で尋ねておいて、返答を聞くのが怖いなんて。

急な話題の転換についていけなかったのだろうか、秋吉は目を大

大きく開けて利春を見つめていた。瞬きを繰り返し、考えているようだ。

質問の意図なのか、どう答えたら利春を傷つけずにすむか、なのか。

本来は僅かな時間なのだろうが、利春には終わりのみえない拷問のようだった。

やがて秋吉がおもむろに口を開く。利春は覚悟を決めて秋吉の言葉を待った。

「嫌いになるはず、ありません。……」

「そうか。良かった」

利春はその言葉がただ嬉しく、不自然に残った間の意味や秋吉の表情にまで心を割く余裕がなかった。

「嫌いじゃないなら、俺の傍にいて欲しい。補佐は結城かもしれないが、俺にはお前がいいんだ。……秋吉」

初めて呼んだ愛しい者の名前は、ソーダ水のように唇を甘く刺激した。

「好きなんだ」

「……え？」

ぼろりと口を突いて零れる言葉。音にしてしまえばすんなりと受け入れることができた。

「だ、めです！　だって、あなたは……」

「家は関係ない！」

自分でも思っていないほど大きな声が出た。
利春の剣幕に圧されたのか、秋吉は口を噤んでしまった。

「『今』一緒にいたい奴くらい自分で決めたっていいだろう……？」

椿も英も平塚もランキングで選ばれたとはいえ、気に食わなければ関わりなど持たなかった。

立場が近い者がいた所為だろう。馴れ合いのような関係が心地よかった。

未来になればなるほどしがらみは増える。

今の内、学生の間はできるだけそれらのものから遠ざかっていたかった。

そう考えれば秋吉たち親衛隊は、自分が格別な存在だと知らしめられる存在だ。だが、秋吉が隊長になってからの親衛隊は驚くほど静かだったのだ。まるでいないかのように。しかし、呼べば誰よりも早く駆けつけた。

さりげないサポートは利春を普通に生活させるために必要不可欠だった。

「最初はいつもと同じだと思ったんだ。学校では普通でいたいののに、周りがそれを許さない。……親衛隊が一番それを突きつけてくる。でも、お前は違った」

眼裏に浮かぶのは初めて会った日の秋吉。身体が小さく、頼りないように見えていたのはただの錯覚だった。

「まさしく影だったよ。俺でも気付かないぐらいにさりげなかった」
「そうです。影であれば満足だったんです。光に知られてしまった影になんの価値がありません。太陽は影のことなど考えてはいけ

ません」

「俺の前に来い。俺が照らす」

「強すぎる光は身を滅ぼします」

頑な過ぎる態度が邪魔だった。これでは二人の距離は永遠に近づくことなどない。しかし、秋吉は今以上を望まない。望まない者に無理強いをさせるほど利春は傲慢ではなかった。ましてや、相手は想い人である。強く出ることができない。

「……どうしてもそばにいるのが嫌だと言うなら、」

声が、途切れる。少しだけ勇気がいった。

これは一種の逃げであり、現状維持の効力しかない。だが、今の利春にはこの方法しか思い付かなかった。離れてしまうよりは、現状の維持を望んだのだ。

「影でいい。想うことだけは許して欲しい」

「そんな……、許すだなんて!」

意外と強い瞳とかち合う。

袖を掴んだ手が震えていた。

ああ、こんなにも近くて、遠い。

「俺が好きでいたいんだ」

「御影様……」

「好きだ。わがままを言えば、これからも俺の親衛隊でいて欲しい」

もう、これ以上は何も言えない。

あとは、秋吉の気持ち次第だ。

「……御影様。私もあなたをお慕いしております」

「それなら……！」

「でも、私は、あなたの傍にはいられません……！ 私のこれは恋慕ではありません。ただの、依存です」

俯いて、叫ぶ。

身が裂かれるように悲痛に響いた。

「1つ許されればもっともっと欲しくなります。いつか離れなければならぬなら、私は、いらぬ……！」

先ほどの台詞は、親衛隊だけに向けたものではなかった。

「俺は気にしないと云っただろう？」

「……重いですよ？」

「構わない」

「あなたの為なら死んだっていいんです」

「それは、遠慮してもらいたいな」

利春がそう言うと、秋吉は顔を俯けたまま小さく震えた。
きつと誤解をしているんだろう。

「お前には生きて俺の傍にいて欲しい。だから、死ぬのは止めてくれよ」

「………あ」

「俺はお前を好きでいていいんだよね……？」

ぱっと上げた顔は赤い。

薄く開いた唇から、もったいないお言葉です、と声が漏れた。

「ありがとう。秋吉」

目立った進展はなく、関係が進んだのかさえ定かではないが、二人にはこれが精一杯だった。

「戻ろうか。二人が待ってる」

手を差し出せばおずおずと触れてくる、その小動物のような姿が愛おしかった。触れた手を離さないように握りしめる。

離さない。呟いた声は小さく秋吉には届かない。しかし、利春は自分に言い聞かせるように、強く、強くそう呟いた。

了

十人十色の幸せ (Side 生徒会長 (後書き))

最終回でした。

今までありがとうございました。

よろしければ、感想、アドバイス等よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0635v/>

臆病者の恋煩い

2011年8月23日23時31分発行